

焦土に植えん



村山皓介

## はじめに

預言者イザヤが主なる神に聴く

「それはいつの日ですか？」と

それはいつの日、色々な解釈があり、様々な意見もあり、又多くの議論があったが、一応現在の落着いた解釈は、それは救い主の現れる日、とのこと。正しくは、「救い主が現れる日はいつですか？」なのだそうだ。

「それはいつの日ですか」

主は仰せられた。

「町々は荒れ果てて、住む者がなく

家々も人がいなくなり

土地も減んで荒れ果て

主が人を遠くに移し

国の中に捨てられた所がふえるまで」

とある、いわば終りの日が近い時……とも読める。

救い主の出現、

イザヤ予言者が主なる神に聴いた答は……

今、七十八才の私は、そういう日に、目の前の焦土に立って目を瞑って手を広げ声を聴いた。その日、私は十才、小学五年生だった私、私は声を聴いた。

「焦土に植えん、刺多き、狂気の薔薇」

私はその日その時そこで聴いた。

意味は分らなかった……けど、植えることは分った。薔薇を植えること、目をあけた私の目の前は文字通り焦土であった。

母は二人の姉と私、そして生れて間もない幼児、弟を背負って前日焼けてしまった私達一家が住んでいた熊谷市星川通に立った。

昭和二十年八月十四日、二人の姉と私、弟を背負った母の五人、猛火の中を必死で逃げ熊谷駅に辿り着いた。

朝が来て家に戻って、正に焦土と化した熊谷市星川町を見、母は膝を地面に着け、手で焼けた土に手を置いて祈って泣いた。

そして母はその土に口を就けた。

母は泣いて祈った。その横に立つ二人姉も又泣いた。

青く高い夏の空に白い雲があった。

そして私は、

「焦土に植えん、刺多き、狂気の薔薇」  
と言う声を聴いた。

昭和二十年八月十四日の夜、日本最後の空襲で壊滅した熊谷市の星川地区

母は何を祈ったのだろうか。

勿論自分を含めた五人の家族、そして今戦地にあると言う私達の父。母にとって夫なる男の無事、それは母の常なる祈りである。

でも私は分る。母は救い主の出現を祈ったのだ、「来て下さい」と。

母はキリスト教の洗礼に与った人だ。

信者なら分っている救い主の出現の日。

「町々は荒れ果てて 住む者がなく

家々も人がいなくなり

土地も滅んで荒れ果て

主が人を遠くに移し

国の中に捨てられた所がふえるまで」

「ああ、今の日本のこの時にこそ……」

母は救い主の出現を祈った。

すっかり焼け跡となった、一面。いや、全面焼け跡となった、私達が愛した私達の熊谷。

ああ……救い主、おいで下さい。

その焼け跡となった熊谷市星川地区、その真ん中を星川が流れて……いた。

昼に重大放送があると伝えられた伝言。

焼けず残った星川小学校の校庭に参集した熊谷市民がああ玉音放送を聴いた。

この日も又、熊谷市は暑かった。

太陽はジリジリとここに集う老若男女に力一杯、力をこめて熱い熱い光と熱を送りつづけた。

### 玉音放送

朕深く世界の大大勢と帝国の現状とに鑑み、非常の措置を以て時局を收拾せむと欲し茲に忠良なる爾臣民に告ぐ

朕は帝国政府をして米英支蘇四国に対し其の共同宣言を受諾する旨通告せしめたり

抑々帝国臣民の康寧を図り萬邦共榮の樂を偕にするは、皇祖皇宗の遺範にして朕の拳々措かざる所

曩なごに米英二国に宣戦せる所以も亦実に帝国の自存と東亜の安定とを庶幾しよきするに出  
て他国の主権を排し領土を侵すが如きは固より朕ちんが志にあらず

然るに交戦已に四歳を閲し朕が陸海將兵の勇戦朕が百僚有司の勵精朕が一億衆庶  
の奉公各々最善を尽せるに拘らず、戦局必ずしも好転せず世界の大勢亦我に利あら  
ず

加之しかるのみならず 敵は新に残虐なる爆弾を使用して頻に無辜を殺傷し惨害の及ぶ所眞に測  
るべからざるに至る

而も尚交戦を継続せむか、終に我が民族の滅亡を招来するのみならず延ては人類  
の文明をも破却すべし

斯の如くは朕何を以つてか億兆の赤子を保し皇祖皇宗の神靈に謝せんや是朕が帝  
国政府をして共同宣言を応ぜしむるに至れる所以なり

朕は帝国と共に終始東亜の解放に協力せる諸盟邦に対し遺憾の意を表せざるを得  
ず

帝国臣民にして戦陣に死し職域に殉じ非命に斃れたる者及其の遺族に想を致せば  
五内爲に裂く

且戦傷を負ひ災禍を蒙り家業を失ひたる者の厚生に至りては朕の深く軫念する所  
なり

惟ふに今後帝国の受くべき苦難は固より尋常にあらず  
爾臣民の衷情も朕善く之を知る

然れども朕は時運の趨く所堪え難きを堪え忍び難を忍び以つて萬世の爲に太平を  
開かんと欲す

朕は茲に国体を護持し得て忠良なる爾臣民の赤誠に信倚し常に爾臣民と共に在り  
若し夫れ情の激する所濫に事端を滋くし或は同胞排擠互いに時局を乱し爲に大道  
を誤り信義を世界に失ふが如きは朕最も之を戒む

宜しく挙国一家子孫相傳え確く神州の不滅を信じ任重く道遠きを念ひ総力を将来  
の建設に傾け道義を篤くし志操を鞏くして誓つて精華を発揚し世界の進運に後れざ  
らんことを期すべし

爾臣民其れ克く朕が意を体せよ

御名御璽

小学五年生の私には何をどう言っているのか、何が何で何なのかは分らない。市長さんとおぼしき人、壇に上って一礼、マイクを握って、

「皆、今、天皇陛下様からの御言葉があった……日本は敗けた。皆が一心で頑張ったのに残念だった。……天皇様はおおせになった。耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、萬世の爲に太平を開かんと欲す、……

いいか、頑張れ！」

市長さんとおぼしき人壇から下りた時

一瞬の沈黙があった。

青い高い大空をちぎれ雲が白く流れて行くのが見えた。

どこからか、泣き声がおこった。

又、声が挙がった。

「死んだ者はどうなるんだ」

「大事な大切な息子を捧げたのよ」

「家が焼けてなくなった」

「私の夫を早く帰して下さい」

号泣する人がいた。叫び声を挙げる人がいた。でも皆は不思議な程静かであった。

「八重汐や、汐の八汐路、はるばると国を離れて、南の島の果てにしあれど、大君の辺に死するなり、大君の辺に死するなり」

「海ゆかば 水づく屍かばね

山ゆかば 草むす屍かばね

大君の辺にこそ死なめ

帰り見はせじ……」

ああ、日本は敗けた

ああ、家は焼けた

ああ、今日の食事は  
ああ、ああ、ああ  
私は母の手を求めた  
母の手を握った  
母の手が反応した  
ギュッと握り返して来た  
大丈夫だ、大丈夫だ、大丈夫なんだ  
母の手は、掌は私に語っていた  
大丈夫だよ、本当だよ  
母の手は伝えていた

一

私、高山正行はこの星川（熊谷市星川町）で生れた。父は秩父の人であったが、当時中学（現在の熊谷高校）だったが熊谷中学を出て熊谷市にある片倉工業に入社した。片倉工業は工業とあるが紡績業であった。兄弟会社片倉絹糸と共に絹糸を扱っていた。熊谷に大きな工場があり沢山の女工さんが働いていた。蚕を扱う農家が熊谷近郊に沢山あった。

母、恵は行田市の出であり、熊谷市にある女子の中学、いわゆる言う所の熊女の出であった。熊中、熊女、埼玉県の県北にあつての優良校、そこへの入学は、尊敬を集める秀才の集う所と言われた。母も熊女を出て行田にある足袋の製造業、福助で働いていた。

父と母とがどういういきさつを経て共になったのかは知らないが、父母は仲の良い夫婦で熊谷市星川町に所帯をもち、二男二女をもった。昭和二十年五月、戦況の悪化、日本の敗北は皆の知る所であったが、正に最後の召集、父は兵隊にとられ出征して行った。

私は小さかったので良くは知らぬ。

小さな星川の家のの小さな庭に蔓薔薇つるばらがあった。竹垣たけがきにからまって長く延び、蔓つるは四方に伸びて周囲の木などのにからまっていたが、五月〜六月にかけ黄色く光る沢山の花を付けて豪華に咲き誇って美しかった。

出征の朝、三月に生れた弟、康平こうへいを抱いた父は私の頭をなでながら、「この蔓薔薇つるばらは、本当、狂気の薔薇そうびだ！」と言って笑った。

バラをそ、う、び、と言う所に出征の日の父の思いがあった。母が二人の姉と共に薔薇ばらの前に立って言った。

「そうよ、そ、う、び、なのよ。皆な総すべて美しい総美そうびなのよ。……この薔薇ばらが狂ったように見えるのは、この薔薇ばらが私の心の中を現しているからなのよ」と言った。しだいしだいに人々が集って来た。

いわゆる、言う所の出征兵士を送る会、出征兵士壮行会であった。

半分ヤケクソの人達が、心、こここゝにない人々が、ヤケのヤンパチ、万才、万才、万才と万才を三唱した。母は顔をそむけ、弟の胸に顔をうずめ、泣いた。

愛し合い、労いたり合あって、小さくも必死で生きて来たこの夫婦を強引に引きさく力がこの全日本を覆おほっていた。

そして八月十五日、私は

「焦土せうどに植えん、刺多とげき、狂気きやうきの薔薇そうび」をしかと聴いた。

その前日、八月十四日、空襲は夜あったけど、その日の昼、（今考えてもつくづく不思議だけど）私は、私のううちの美しい黄色の蔓薔薇つるばらが花の跡あとの所に小さな種たねを就つけているのを見た。家の台所だいしよにあった空からのマッチ箱まっちば箱ばを持ち出して私は、小さな黒い粒つぶの様な薔薇ばらの種たねを採取した。見る見る小さなマッチ箱まっちば箱ばに一杯いっぱいになった。

私はそれを非常持出し用の私のリュックに入れた。

どうして、その日その時そういうことを私はしたのだろうか。

その夜の空襲、その夜の全焼、その夜にあった私の家の破滅はめつ

その夜の空襲、私は唯一、非常持出し用のリュックだけ背負って走って逃げた。

私にとっての全財産であるリュック一つ。焼夷弾の一斉散布の空襲の凄さは、家だけでない、家にあった樹木、芝生、草なども皆、奇麗さっぱり、完全に焼き尽くしていた。

どうしてか、なぜか、私は私のリュックの中に薔薇の種がある事を忽然と思い出した。

小学五年の（当時国民学校と言ったが）私は何を考えたのであろうか。「焦土に植えん、刺多き、狂気の薔薇」、私はそれをどう理解したのか。

姉と（二人の姉）母の会話が耳を打った。

「どうするのお母さん」

「どうなるのお母さん」

「私はね、高山家の嫁だから……秩父へ……秩父へ……秩父へ行くわ」

その時だ。私は、正に焦土と化した私の生家に、薔薇の種を蒔いた。

マッチ箱一杯の種は丁度、私の右の手の掌に山盛り一杯となった。

私は手を大きく振ってその種を蒔いた。

種は四散して旧の空地跡に撒かれた。

そしてそれは一瞬だった。

母はその光景を見た。

「涙のうちに種を蒔く者は、喜びのうちに刈り取る」

「まだ小さいから分らないだろうけどもね、これは聖書の言葉なんだよ正行……」

「まだあるよ」

「……いいか……こういうんだ、良くお聴き……」

母は涙を零した。

「明日がもし、地球の最後の日であっても、私は今日林檎の種を蒔く……」

母は泣いた。でもはつきりと、そしてきっぱりと言った。

「私は埼玉の女だよ。熊女を出た女だよ。」

私を苦しめる者よ、こんなことで私は敗けないよ。もっともっともっと苦しめて

ごらんよ。へこたれやしない。耐えて見せる。私は行田の女だよ。忍城の成田長親

……

のぼう様の、そうデクノボウ様の末裔だよ。

知っているだろう。私を苦しめる者よ、私は勝つことも望まないけど、敗ける事だけは承知しない。敗ける事は断固拒否する」

それは母の慟哭であった。

正に母はその時何もなかったのだ。

きれいさっぱり、その一切を失った。

その日私達は何か口にしたろうか。又、一刻でも眠ったろうか、何か飲んだのか

……

でも母はいつものとおりに笑った。

「私には、こんなにいい子が四人もいるんだよ。アッハハハ、アッハハハ……」

それは母の天性のものだった。

「さあ、皆、秩父へ行こう！」

どうしてこういうことになるのだろうか。

秩父鉄道の車輛に倒れ込むように入った母と四人の子。長姉厚子、次姉春子、長男正行、次男康平、母、恵。

近くに座った年老いた夫婦、老爺と老婆、膝の上で開いた袋にあった、さつま芋。さっと差し出した大きな芋、数本。

「さあ、全部食いな！」

それは正に、正に、正に

地獄で仏と言う光景であった。

老爺と老婆が言った。

「何んたって、若いんだから、どうにでもなるよ。な、そうだろう」

「この世つうのは、助かるように、作られているものなんだ」

「今日のこの日を、なつかしく思い出す日がやって来る」

そして小さな器に水をついで私達に飲ませてくれた。

そして不思議、大麻生で二人は降りて行った。「少ないけど」母に渡した小さな包み。そこにあった、一握の米。

秩父に着いた。私にとつて祖父、祖母。

「ワァーッ！」と言う喚声かんせいが湧き起きた。

「ああ良かった。生きていたんだね！」

「まあ、これって一体全体何！」

「夢でも見てるみたい！」

父の兄一家、祖父、祖母。

湧き上り湧き起った喚声かんせいに近い叫び声、喊声と言うのがふさわしいときの声、伯父、伯母、従姉妹達いとこ、従兄弟達いとこ、湧き上り湧きおこった喜びの声。八月十五日、それは旧盆の中日でもあったのか……

逼迫ひつぱくしたあの時局のあの時、窮迫きゆうぱくしていたに違いない日々日々の筈。でもあの日、あの時、秩父市熊木町、高木の祖父の家に満ち満ちてあったあの温くもりは何だったのか。蓄えたくわなどあったのか。祖父、伯父、を囲かこんだ高木の家にあった暖かなものは何だろうか。伯父と祖父は酒など口にしていた。

宴うたげは終わった。眠りに就ついた私達、深い深い深い眠りであった。小用で起きた私は、蚊帳かやの中に座し、祈いのっている母を見た。

これだ、私達にいつもある救い、それは母が祈る人だと言うことであった。

いろいろな事があった。様々な事があった秩父での五年、小学五年生の私が中学卒業まで、この秩父熊木町の高木の家ですごした日々、これについては後述するが、私達、正にホームレスだった私達は、八人もいる従姉妹、従兄弟、それにうちの四人兄弟、祖父、祖母、伯父夫婦。九月末、帰還した父、を含め、十八人が、この小さな家うたげにあって……何と、平穏で平和だった。

平穏で平和、それは決して喧嘩けんかしないとかが争いがないとか、そういう事ではない。年がら年中、いつも常にそしてたえず、そういうことはある。毎日毎日毎日、すべて、ころんだ、喧嘩けんかした、仲直りした、さわいだ、叱なぐった、叱なぐられた、泣いた、笑った、それは、それはいつもあった。

でも感謝である。私達は皆、仲が良かった。そしていつも赦し合えた。母はいつも祈いのっていた。

秩父での五年、小学五年生だった私が中学三年生、中学はその私が中学一年になる昭和二十二年に発足した新制中学なのだ。必然的に言って私達は新制中学の一年生になった。

秩父は山紫水明、山の幸多い平和な地である。山は深く沢山の雑木が生い繁っている。

山の中で子供達がキャツキヤ、キャツキヤと遊んでいて、とがめだてに会った事はない。回りの人々も子供達が山で遊ぶことについては寛容であった。

祖父、高山真悟は秩父セメントで働く職工であると共に、五反歩ばかりの農地をもっている百姓であった。祖母が主として農の事はやっていた。勿論、祖父も長男の伯父、又、嫁である伯母も又、身を黒くして働いていた。伯父の家に八人の子がいたとすでに述べた。

祖母はフミと言う名。高山真悟、フミ夫妻にも五人の子があった。長男、伯父は高山金吾、その嫁、伯母に当る、福。そして子は、長男三樹男、長女安子、次女貴子、三女純子、次男直樹、三男裕太、四女美紀、五女淑子、そして私の家は、父、高山喜作、母、高山恵、長女厚子、次女春子、長男、これは私だけと正行、次男康平で、この十八人が秩父の高山家にいた。

こういうこと、詳しく記して記せない事はないけど、煩雑な上に分りにくく、又物語の進行にそれほど重要でない。

姉、長姉、厚子は、熊女（旧制）の四年生。次姉春子も熊女の二年、私が小学五年、そして弟は生後五ヶ月、これが昭和二十年八月十五日現在の姿であった。

長姉は、そして次姉は卒業迄、秩父から熊谷まで往復、熊女、旧制五年の女子中学を出て、長姉は熊谷にある厚生省の衛生試験所に入所。次姉は、東京に下宿し、難しい試験に合格して外務省に勤務した。又、復員して来た父は幸運にも、秩父にある有隣興業と言う秩父セメントの下請、セメントを入れる袋など作っている会社

へ入った。秩父セメントにあって、ある地位（長く勤めていたので）にあった祖父が働いて、入社出来たらしいが、終しまに、この有隣興業は、各医院や薬局などで使う薬くすりの袋など作るようになり、これが又当って大きな会社となった。

父の存在も、この会社の隆盛に一役を果したが、後に、父は、母と私達を連れて熊谷に戻り、熊谷にある北関東サンキ、とか言う衣料品を扱う会社へ転職した。

一家に歴史あり、父と母を中心に四人の兄弟姉妹あった私の一家、高山喜作の事を書いて堂々の一書になると思うが、今、私は自分の事を書いているのだ。

この秩父にあった五年、小学校を出て新制中学の三年、これが終わった時、一家は挙あげて熊谷に移うつるが……この秩父の中学にあった三年、私は恋をした。

幼おきなくて恋を知らず、と言う言葉があるかどうか、私はまだ幼おきなかったので恋と呼べるかどうかは分らないけど、坂本清美チャンが好きになった。坂本清美チャンは、秩父の人なら誰でも知っている、「秩父正宗」なる酒を製造販売している坂本酒造の令嬢れいじょうなのだ。六人兄弟姉妹の五番目、女でも三女と言う所、坂本酒造は清流が流れる荒川沿ぞいに大きな酒蔵さかぐら三棟を構える御大家の令嬢れいじょうの一人。でも中学生になったばかりの私には、そんなことは別にどうでも良かった。私の目には、奇麗な上に可愛く、何となく動作が上品に見え、如何にも良家の娘むすめと言う品格があり、それでいて動作が敏捷びんしょうであった。又、勉強も良く出来る娘こであった。私が、いいなあー、と恋こがれているのに、坂本清美チャンは私など目にも入れてないみたい、近づくとツーンとして「来ないで！ 近ちかよらないで！」とでも言っている態度を示した。

中学一年生（新制中学第一期生なので）上級生のいない第一期生、どうしていいか分らないで、ただ、うっとりして見ているだけの私。まともに話したいのに、近づくと声が出なくなる私。その上、「来ないで！ 近ちかづかないで！」とでも言っているような素振そぶり。

でも益々好きになる私の煩惱ぼんのう ああ、  
その年も冬が迫せまって来る十二月三日、秩父夜祭の日だった。

秩父神社の境内けいだいにあって、アッ！ と声を挙げたくなる着物姿の美しい清美チャンとばったり逢あった。

私はゴクリ、息を飲んだ。

「ワアツ、清美チャン……ワァーッ！ 奇麗！ スゲエ！」と私。

「高山君、駄目よ。触<sup>さわ</sup>っちゃ厭よ！」

でもどう言うのか、後の帯<sup>おび</sup>が太鼓になっっているあたりに私は触<sup>ふ</sup>れた。

「駄目ッ！ って言ってるでしょ」

坂本清美チャンは小走りに神社境内の裏手の木立の方へ、着物のせいで早く走れないのか、そ、そ、そ、と言う具合で動いた。

私は動作事由と言うか先回りして清美チャンの前へ回った。

「奇麗じゃないか、似合うじゃないか、いい女に見えるよ……」

どうして私はこうなのか。いつも考えたり思ったりしている事と違う言葉が実際に下品で下劣に出た。

どうして、なぜ、私は自分のしている事が実に下品<sup>わる</sup>で悪<sup>わる</sup>で、相手に失礼とは思っただが、両手を伸して正面から両肩<sup>つか</sup>を掴んだ。

「高山君、やめて。怒<sup>おこ</sup>るわよ、私！」

私は何をしたいのか、何をどうしようとしているのか。私は私がしたい事が分らず、両肩に手を置いて立っていた。

坂本清美チャンはキツと私を見た。

目に力を込めて私を睨<sup>にら</sup>んだ。

そして、声に力を込めて言った。

「私はアンタなんか大嫌いなんだ。大嫌いの大嫌、高山正行なんて死んじまえ。大嫌いは大嫌。……さあ！ 私を放して、そこをどきな！」

私は無惨にも敗けたのだ。

すくすく手<sup>て</sup>を放し、どいた。

「高山君、こういうこと二度とやったら先生に言いつけるよ。淑女<sup>しよ</sup>に対して失礼でしよ！」

そう言っって彼女は堂々と歩いて、表の神社の鳥居の方へ歩いて行った。

無残なのは私だった。ポカンと口をあいて力弱く、無残な心を抱いて私はそこに立っていた。祭特有の笛、太鼓の音が高く聞えた。

そして手に、手の掌<sup>ひら</sup>に残っている清美チャンの体の温みをなつかしんでいた。そ

して、私は自分がどうしようもない馬鹿に思えた。

ああ私はどうしてこうなのか。

翌日、学校で坂本清美チャンに会うのが怖かった。でもどうしようもない。クラスは同じ、席も近い。そして翌日、私は清美チャンに会った。……どうしよう……。

でも彼女は堂々としていた。私の所へ来た。「高山君、昨日はどうも。……ごめんね。私……気が立ってたの……ごめんね。……でもね、私、アンタに触わられて、本当は嬉しかった。……奇麗と言われてね、嬉しかった。……女ってイヤな動物だね。……ごめん、……昨日言ったこと取消よ……好きとは言わないけど、嫌いじゃないよ。……本当よ。……」

「いやね、ゴメンと言うのは僕の方だよ。ゴメン、僕は自分が何をしたのかも、何をしなかったのかも、そしてどうしたのかも……ゴメン。もう二度と、絶対にしない……ゴメン。……でもね、分つてると思うけど、僕は君好きなんだ。死ぬほど好きだよ」

そういうドラマがあつて年が明けた。

若い娘である坂本清美チャンと又も逢った。正月元旦、お正月らしい正装の着物姿の清美チャンが秩父神社にいた。振袖ふりそでとでも言うか袖そでの長い美しい着物姿で、お母さんとおぼしき婦人と、姉とおぼしき婦人二人、そして妹と思える女の子、四人姉妹が実にあでやかに神社正面に立った。私の方も、二人の姉と父がいた。母はキリスト教なので神社には来ない。私が父と姉に清美チャンの家族を紹介し、清美チャンも、「これ、私のお母ちゃん、これ私のオネーちゃん」と言う可愛い挨拶をして二つの家族が笑い合つて一礼した。

そういう事あつて、清美チャンと自由に、そしてザック balan に話せるようになってたけど、悲しいかな、清美チャンの方は、別に僕の事、好きでも嫌いでもないけど、あんまり私に近づかないで……あんまり私を好かないで、と言う素振りをした。

女と言うのはむずかしいものだ。近づくと逃げるのに、避さけると近づいて来る。関心を示すと煩わづがるのに、無視すると怒る。熱心になると手玉を取るように振り回し、無関心になると引ひっぱる。

中学三年間、そしてあて中学三年になると、僕は熊高こと熊谷高校を目ざし、坂本清美チャンは熊女こと熊谷女子高校を目ざした。

二人で手をつなぐなんてこともなかった中学の三年間で、それでも三回あった秩父の夜祭りの日は、二人きりで、秩父神社の裏の、ほの暗く、又、ほの明るい、ロマンチックな笛と太鼓の音を聞きながら、とまどいながらも清美チャン背中に手を当てるようなことはした。三年生にもなると清美チャンも落着いて、拒否もしないかわり肯定もしない、と言った態度を示した。

これが僕の初恋であった。

### 三

中学卒業の日が近づいて来た。私はギリギリ、やっとのこと熊谷高校に入学出来た。熊谷高校に進めた男子は秩父市で八名だけだった。清美チャンはかなり成績の良い女なので、余裕をもって熊女に入った。熊女に合格出来た女は、秩父市で五名だった。

「二人で熊谷へ通えるね」

なんて清美チャンは私に近づいて来て言ったけど、私は、「いや、通えない。だって、僕ん家は熊谷に引越すから……さ」と淋しく言った。

そうだ。私が中学卒業した昭和二十五年の三月、私の家、一家六人は熊谷市に引越した。あの熊谷空襲で焼けた星川地区でなく、熊谷市の中心から少し外れれている曙町に住んだ。

一軒家ではあったが、借家であった。

あの焼けた生家の跡地は大きな病院が建った。慈恵病院とか、四階建の堂々とした立派な病院で、生家跡は駐車場となっていた。

広大な面積はぐるりフェンスで囲まれてあった。そして何と私が蒔いた蔓薔薇が

生家跡あとのフェンスに生育して葉を就つけていた。

それを見て私は涙こぼの零こぼれるのを覚えた。

夏になったら、五月〜六月、この蔓つる薔薇ばらはあの可愛いく奇麗な花を咲かせて黄色く光る筈である。あの日あの時、私は手の掌ひら一杯に種を握り放ほうつたのだ。あれから五年、フェンスに張り就ついて生きていたとは。駐車場となつてゐる所は全面アスファルトで舗装ほそうされて草一本生れていないのに、フェンスの下の狭い地に落ちた種はこうやってそこに根を張はって伸びて広く張りついている。そして五年の才月はこの蔓つる薔薇ばらをかなり大きなものにしていた。こつちに面した病院から必ず見える筈である。そして病人を、看護する人々を、あるいは見舞に來た人々を、いづれにせよ、なくさめ、励はげまし、力を与える筈である。

焦土せうどに植えん、刺多とげき、狂氣きやうきの薔薇ばら

あの声は誰の声だったか。そしてその声を実現させた者の力は、それは何であつたのであろうか……。

私は正直、熊谷高校に入学出来て嬉たのしかった。ギリギリ、例え最下位でも入学は入学である。熊谷高校生に違ちがいない。私はその日までの中で、中学卒業の日まで生きて、熊谷高校合格の掲示板を見て、私の番号、私の名のあつた、あの日が一番嬉たのしい日であつた。

でも又、私は思う。私は熊谷高校に入学しない方が良かった。程度ていどが私の實力よりずっと上であつた。悲しいかな、私は熊谷高校で最劣等性であつた。勉強について行けなかつた。楽しかるべき高校での一日一日が正に地獄であつた。何にも分らない。

英語、皆、スラスラ読み、スラスラと訳して行くのに、私は百行の中の一行も、千字の中の一字も分らなかつた。

数学の、代数も、微分も積分も、サイン、コサイン、そういうもののいっさいが分らなかつた。分わらない、と言いう病かに罹かつてしまつた。A + B || ×なんて、気が狂くるう思おもいで聴きいた。英語の朗読は正に悪魔の呪文まじなまに思おもえた。

私が指名され、立つて読む番になつても、一字も読めなかつた。回りの人が囁ささいて教えるのをくり返し、侮蔑ぶべつ、嘲笑ちやうせうを買かつた。

来る日も来る日も地獄であった。良く気が狂わなかった、と思う。

夏休、盆の頃、私は慈恵病院の生家跡のあの蔓薔薇つるばらの所に行つて、花の跡あとに黒く付いている種根たねを採取して、借家の曙町の小さな庭に蒔まいた。私はめっきり笑を失つていた。

父も母も私の事心配して家庭教師を雇つて私の勉強を見させたが、私の「分らない病」は治らなかつた。

家庭教師が来る日、それは正に苦しみの日であつた。家庭教師は、私の理解などまったく構わず、どんどんすすすめ、時間になると帰つて行つた。

泣きたいような、死にたいような日々。

一年経つて、借家の小さな庭に、あの蔓薔薇つるばらが小さな芽を出した。私は真実嬉しかつた。そうだ。焦土の植えん、刺多とげき、狂氣の薔薇ばら……なのだ。

誰でもそういう所を通るものなのか。私にだけある弱さの故か。私は自慰あくへきの悪癖あくへきに染まつた。勿論、こういう行為のいけない事は分つていた……が。

私は自分、私と言う人間がこの世界で一番陋劣ろうれつな人間に思えた。生きるに値あたしない最悪な人間に思えた。でも食欲はあつた。

正直、私は死にたかつた。でも死と言うのはそう簡単ではない、私は生きていた。生きてはいたけど、十五才十八才、人生の中で花の時と言うこの高校三年間、私は心の中でのうち回つていた。死んでいた。

じゃ、何が私の救いだつたか。私は本を手にした。ユーゴーの「レ・ミゼラブル」、トルストイの「イワンの馬鹿」「アンナ・カレーニナ」、ドフトエフスキー「罪と罰」、マルタン・デュ・ガールの「チボー家の人々」、セルバンテス、「ドン・キホーテ」、太宰治の「走れ、メロス」、志賀直哉「暗夜行路」、武者小路実篤「友情」、倉田百三「出家とその弟子」

いや、いや、いや、その他沢山の本を読んだ。そしてイエス・キリストに触ふれたのである。「聖書！」

この半分馬鹿みたいなの、又半分死んでいるみたいなの私であっても、聖書（新約聖書）における、キリストの孤独が良く分った。又、罪のあがないの為に十字架に就くキリストの行動は非常に良く理解出来た。

私は、熊谷、カトリック教会の戸を叩いたのであった。出て来た、外国人の神父（あとで分った、ポーランド人神父、ゲラルド・ピオトロフスキー神父だった）に私は大声で叫んだ。「助けてくれ！」であった。

「頼む！ この私を助けてくれ！」

その体の大きなポーランド人の老いた神父めがけ私は全身で撲つかって行った。

そして私は大声で泣いた。

「僕は、僕は、僕は分らないのだ！」

「僕は、僕は、僕は、XもYもボーイもガールも……そして何が正しいのかも……要するに分らない病に罹っているんだ……」

「ねえ、神父さん、僕は、僕は、僕は、要するに何にも分っていないんだ。僕って誰なんだ、僕は正しい人間なのか……それとも、生きてない方がいいのか……どうして、どうして、どうして、僕は僕は僕は、こんなに苦しいのか、どうして死にたくなるのか。どうして生きてたらいいいのか、要するに、要するに要するに、どうにもこうにも、何ともかんととも、この、のたうち回る苦しみは何か」

しばし時間がたった。どのぐらいかは分らない。でも、神父は、私に沈黙を命じ、膝まずかせ、手を頭の上に置いて祈った。

そして、何ともかんととも、まったく予期せぬ言葉を発した。

「アナタ」と神父は言った。

「アナタは、とってもいい所にいます」

「アナタ、誰でも皆、何も分ってません」

「アナタ、アナタは、その分らないと言うことを分っておられる」

「いいですか。アナタ、体を動かして働きなさい。家に土があったら土を耕しなさい。土を掘って苗を植えなさい。種しかなかつたら種を蒔きなさい。泣きながらでも、種を蒔きなさい。……いつか収穫します。……そしてその時、アナタは、アナタが誰かを知ります。

ポーランドには『焦土に種を蒔け、収穫の日喜べ、その日救いが来る』と言うことわざがあります」

「いいですか。自分が誰かを知る人は少ないのです。いや、分らないと言う事を分っていない人が大勢います。アナタは分っていない事が分っている救いの門口に立っている人なのです。いいですか、むずかしくありません。神に、神なる主、主なる神、天地万物を造られた神に祈りなさい」

「私はカトリックの司祭ではあっても、アナタを助ける事も救うことも出来ません。お出来になるのは天地万物を創られた唯一の真実の神お一人です。神に祈りなさい。私にはなく、助けることも救う事もお出来になる唯一の真実の神に祈りなさい。そうすれば、助けられて救われるのです」

「今日初めて会った貴男だが、私はアナタが本当の人に思えた。本当のものを捜している人に見えた。……少々乱暴でしたが……」

でも私は貴男が真直ぐな人に思えた。何て言うか、救われる人に思えた。いいですか、体を動かして耕して種を蒔きなさい。……」

「出来たら友達になりましょう。大部年は違ってはいるけど、私はアナタを好きになれるように思えてならない……友よ、友よ、友よ、互いに、互いに、互いに救いを求めようじゃないか。アーメン、ハレルヤ」

ゲラルド神父は私を自分の執務室へと招いて下さった。私は私が高山正行だと  
言った。

「高山さん、考えて分らないことは、正直そうなんだと思いなさい……」

「1たす1は2である……分ったと思う人と、何でそうなるの、分らないと言う二  
種類の人間がいます。BOY、ボーイ、ビーオーワイはボーイ、分ったと言う人と、  
何でそうなのか分らないと言う人、この二種類の人があります。いちたすいちがどう  
して2なのか考えたって分りませんよ。ビーオーワイがどうしてボーイなのか考え  
たって分りませんよ。」

何で生きるか……なんて正に哲学上の大問題。いちたすいちがに、と信じなさい。  
ビーオーワイ、はボーイと信じなさい。何で生きているのか分らなくても、現実に  
生きていると言う事実を分りなさい。そういう現実にある事実を信じなさい」

「だってそうでしょ。アナタは自分が高山正行と言う人間だと分っているのでしょ。  
じゃ、なぜアナタは高山正行なのですか。……答えられますか。……現実に、今、  
ここにあって、ここで息をして、私の話を聴いている高山正行が高山正行なのであつ  
て、どうして？ とかではありません。私は、ポーランド人神父、ゲラルド・ビオ  
トロフスキーであつて、どうしてとか何でを超えて、現実にここにこうして存在し  
ているゲラルド・ビオトロフスキーなのであつて、どうしてとか何で超えて現実に  
そうなのです。」

現実にそうであると言う事実を信じなければ人は狂ってしまいます」

「そうでしょ。なぜ、なんで、どうして、高山正行さんは高山正行なのか、だって、  
そうなのですもの、アナタはアナタである」

「我思う故に我れ有り……分りますか。アナタは、ここに現実にあつてここに存在  
している高山正行と言う人なのです。なぜとかなんでとか、どうして……を超えた

現実ここに存在している」

「でも、なぜとかどうしてと考える事は本当は大切な事なのです。あのニュートン少年が、林檎りんごの落ちるのを見て、なぜと思いついておかげで全人類は大変な恩恵を受けたのです。万有引力の発見は、物理学史上最大の発見だと言われている。なぜ、リンゴは地に落ちるのか……笑いたくなる事実をつきつめて考える。これは非常に実に大切な事ですけども、一步まちがえると、それこそ狂人きちがいになってしまいます。

君は今日この教会に飛び込んで来た。

ああ、何と言う幸いか。

アナタは、君は、何と幸いか。

だって君が飛び込んだ所は教会だったのだと言う事実であり現実でした。

君は橋の上から川へ飛び込んだのではないのです。ビルの屋上から地面のアスファルト舗装上へ飛び込んだのでもない。走って来る汽車に向って飛び込んだのでもない。君は、この世で唯一、人を救い得る神の宮である教会に飛び込みました。これが救いでなくて何なのでしょう」

「君は今、多分、大混乱の中にあると私は見ている。さあ、君、アナタ、高山正行さん、あれこれ考えるのを止めて現実にここにある事実を認め、その事を信じるのです。アナタはめったにない希有けうゆうの人だ、この若さで、教会へ飛び込んで来た！」

「さつき君は言った。人はなぜ生きるのかと。これは哲学上の大問題ですけど、私は私なりに答を用意しているのです。だって私は、カトリック教会の、この熊谷地区の主任担当神父だからなのです」

「人はなぜ生きるのか、とアナタは問うた。私が用意している答は、それは『イエス・キリストを知るためなのです。……』

唯一の真の本の神を知る為なのです』と言う一言に尽きるのです。聖霊来て下さい。

高山正行と言う真実を探し求めた人が多分見つかるであろう真なる唯一の本当の神を探す旅へ、さあ、今日、私と一緒にスタートしましょう。聖霊を受けるのです！」

## 終章（おわりに）

冒頭、私は私が現実に、もう命の終りにさしかかっている七十八才の男性なのだと記した。そしてここに記した様な経験を終て、今熊谷市曙町に在住している。

誰でもそうであろうけど、七十八才の春まで勿論色々な事、様々な事があった。

結婚して家内と四十八年共にいる。子供は五人恵まれた。娘は嫁に行った。四人の息子のうち二人は結婚し妻を得、子も得た。

今年八月、もう一人赤チャン来るらしい。

でもその子を含め孫は三人。現在は二人である。嫁は子に恵まれず、二人の男子は未だ結婚もしていない。

ザツとふり返る私の半生。正直な話、私は成功者と言うより大失敗者である。自分で興し、自分で指揮監督し執行した私の事業にあつて、私は私の根底の元の元をくつがえす大失敗をした。

私と妻とのさすらいの旅はずっと続いた。

愛する妻だけではない五人の子には正し辛酸を嘗めさせてしまった。

働いた場所は、何と、四十ヶ所以上である。朝に解雇されれば夕には次の仕事に就かなくてはいけなかった。

普通の人近づかない屎尿処理業と言う最低の所で丸二年すごした事もあり、烈風吹きすさぶ、東北秋田の日本海沿岸近くにあつてトラックごと共に風に飛ばされ、正に九死に一生を得た体験もした。

大勢の債権者達の罵声の中で、地面に手を置いて耐えた日も、コンクリートのミキサーの中で、ミキサーにこびり付いているコンクリートを剥ぐ仕事をした。誰かがあやまってスイッチをオンしたら、私に命はなかったであろう。清浄な平穩な平安と言うよりは異常な危険な不安な所で、罵声を嘲笑をそして蔑みの声を聞きながら時を過した。

別に誇張して言っている訳ではないが、私は、いつも常に絶えず最低線の所から呻いていたのである。何で、どうして、……私はいつも、常に絶えず自分に問うた。

別に私は他に比しても劣悪れつあくにして陋悪ろうあくな性格ではない。又、二十才にして私はカトリック教会で洗礼あずかに与り、信仰を持ち、神を信じて生きて来た。勿論、私はいわゆる言う所の聖人でも君主でもない。いわば欠点かたまたの塊りでも又ある。でも私は狡知こうちを働かせて人を貶おとしめるとか、意地悪を計はかろうとかと言った事は断じてやった事は無い。

いや、神様の前に立っているとしてみても、神の前でもはっきりと断言出来る。私は公平を旨として親切で善意で事を行って来た。

弱さから来る躓つまずきも、いたらなさから来る失敗も、貧しさから来る充分でない点、それは沢山ある。でも、私は正に狡知めぐるを巡めぐらせて人を陥おとしれるなどと言う事はした事がない。出来得る限り相手が喜ぶように図はかって今日まで来たのだ。

でも、私は考える。あの日あの時、せっぱつまって飛び込んだカトリック教会で私の得た恵は筆舌を超こえてある。

やはり私は救われた人間なのだ。

その日、私は秋田県秋田市土崎港のカトリック教会の聖堂で椅子に座り、手を合せて祈っていた。沢山の（大勢の）人が私をとりかこみ各人手を伸し、私に按手あんしゅして祈った。

聖書にある。異言の祈りの中にあつた。

主任司祭、リータス神父（ドイツ人）は、私に按手して言った。

「おめでとう。高山正行さん。貴男は聖霊に満たされました。アーメン、ハレルヤ！」

その日帰宅して家にあつた私に、妻は微笑して私を見回した。「今、何て言ったの？」

私は別に、何とも言ったのではない。「只今！」とか「帰ったよとか……」

「ね、もう一遍言つて頂戴」

「ペラペラペラペラ……」

異様な外国語。一度として聴いたことのない、何か、アラビアとかアラムとか何とか、かんとか……。「ピチャチャラペラ……」

そうだ、私は確信した。聖霊に満たされてある者に必ず現れる異言の恵

熱い熱い熱いものの塊かたまりがグリーンと肚はらの奥からつき上げて来て、私は狂った様に笑  
いころげた。正に異言の祈りの恵が私に来た。

そうだ！ 聖霊に満たされた者に現れる異言の恵が私の体全体を完全に覆おほったの  
である。

普通の人には、こういう時泣くのだそうだが例外として笑う人もいる、と後で聴い  
た。

私は聖霊に満たされたのである。

それは誰にも彼にもまんべんなく全員にと言うのではない。やっぱりそれは恵ま  
れたるもの、選えらびに選えらび、そして選えらびぬかれた者にだけ与えられる聖霊の満たしの  
恵そのものであったのである。

ああ何と言うありがたさであろうか。

私は選ばれた者なのである。

何千とか何万とかの中から選えらびぬかれてついに満たされて恵あずかに与あった者！

一人になって私は一人でドツと泣いた。

恵は主からこの日私に届いたのであった。

そう恵はこの日、私に届いた。

なぜか、どうしてか、それは私が弱くて貧しくてそうしなくてはならなかったか  
らだ。